



# 焼き尽くす炎

祝福の香りか、裁きの炎か？

デイアン デルチェヴ  
ケビンJ.ムリンズ

# 焼き尽くす炎

祝福の香りか、裁きの炎か？

ダイアン デルチェヴ  
ケビン J. ムリンズ

発行元



2020年5月

# 目次

神からの火の降下 .....	4
神の御言葉と自然の鏡 .....	5
人間と大地の関係性 .....	6
洪水は同じ原理で動作する .....	8
律法の鏡 .....	11
十字架の啓示 .....	15
神の御顔の隠れ .....	15
裁き .....	20
火の神聖なパターン .....	25
神の愛—いのちの香りか、燃える苦悩か .....	31
神の栄光ある性質 .....	38
神からの火か .....	44
罰の度合い .....	50
結論 .....	53

## 神からの火の降下

多くの人々にとって、千年期の後に起こる火による裁きの描写は、神が人間を直接殺すという決定的な証拠と考えられています。

千年の期間が終ると、サタンはその獄から解放される。そして、出て行き、地の四方にいる諸国民、すなわちゴグ、マゴグを惑わし、彼らを戦いのために召集する。その数は、海の砂のように多い。彼らは地上の広い所に上ってきて、聖徒たちの陣営と愛されていた都とを包囲した。すると、天から火が下ってきて、彼らを焼き尽した。そして、彼らを惑わした悪魔は、火と硫黄との池に投げ込まれた。そこには、獣もにせ預言者もいて、彼らは世々限りなく日夜、苦しめられるのである。ヨハネの黙示録20章7～10節

聖書を表面的に読むこと、そしてこのように難解な箇所と組み合わせて読むことは、神が人を殺すという考えに容易に至らせるだけでなく、地獄が永遠に続くという考えに導いてしまう可能性があります。というのも、黙示録の前半には、同じ出来事に関して次のような記述があるからです

その苦しみの煙は世々限りなく立ちのぼり、そして、獣とその像とを拝む者、また、だれでもその名の刻印を受けている者は、昼も夜も休みが得られない。ヨハネの黙示録14章11節

ある主題についてすべての聖書の記述が一致して、初めて私たちの理論が真理であると確信することができます。神が火の池において悪しき者を直接裁くという解釈における最大の矛盾は、イエス・キリストの生涯にあります。キリストは、父なる神の御品性を完全に啓示するために来られました。私たちが地上でのキリストの生き方を見ると、神がどのようなお方であるかを確かに知ることができます。

イエスは彼に言われた、「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言うのか。ヨハネによる福音書14章9節

わたしは、わたしにさせるためにお授けになったわざをなし

遂げて、地上であなたの栄光をあらわしました...わたしは、あなたが世から選んでわたしに賜わった人々に、み名をあらわしました。彼らはあなたのものでありましたが、わたしに下さいました。そして、彼らはあなたの言葉を守りました。

ヨハネによる福音書 17章4, 6節

キリストが地上におられたとき、彼は誰ひとり殺すことはありませんでした。黙示録 20 章に描かれているいかなる出来事も、神の御子が地上で啓示された父なる神の御品性と矛盾するものであってはなりません。このことを念頭に置きつつ、私たちは黙示録 20 章 7~10 節の出来事に関する要因を、聖書全体にわたってどのように説明されているか詳しく調べていきます。

## 神の御言葉と自然の鏡

聖書は私たちに次のことを教えています。神は(1) その「御言葉」によって世界を創造されたこと、(2) 同じ「御言葉」によって今も世界を保ち続けておられること、そして(3) この「御言葉」こそが、神のひとり子であるということ。

主の御言葉によって天は造られ、主の口の息吹によって天の万象は造られた...主が仰せになると、そのように成り主が命じられると、そのように立つ。詩篇 33 篇 6 節, 9 節

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった...そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。(私たちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、) めぐみとまこととに満ちていた。ヨハネによる福音書 1 章 1~3 節, 14 節

御子(キリスト)は、見えない神のかたちであって、すべての造られたものに先だって生れたかたである。万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、みな御子にあって造られたからである。

これら小さいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである。彼は万物よりも先にあり、万物は彼にあって成り立っている。コロサイ人への手紙 1章 15～17 節

すべてのものは神の御子によって「成り立っている」ということは、つまり、神の力が絶えず働いていなければ、世界は完全な混乱に陥ってしまうということを意味します。世の中のすべてのものは、神の御言葉—すなわち私たちの主イエス・キリスト—の力によって支えられています。しかし、この力によって保たれている秩序を揺るがす唯一のものがあります。それが罪です。

そして主は言われた、「あなた（カイン）は何をしたのです。あなたの弟の血の聲が土の中からわたしに叫んでいます。今あなたはのろわれてこの土地を離れなければなりません。この土地が口をあけて、あなたの手から弟の血を受けたからです。あなたが土地を耕しても、土地は、もはやあなたのために実を結びません。あなたは地上の放浪者となるでしょう」。創世記 4章 10～12 節

地は全くむなしくされ、全くかすめられる。主がこの言葉を告げられたからである。地は悲しみ、衰え、世はしおれ、衰え、天も地と共にしおれはてる。地はその住む民の下に汚された。これは彼らが律法にそむき、定めを犯し、とこしえの契約を破ったからだ。それゆえ、のろいは地をのみつくし、そこに住む者はその罪に苦しみ、また地の民は焼かれて、わずかの者が残される。イザヤ書 24章 3～6 節

## 人間と大地の関係性

カインが兄弟を殺したことから生じた呪いは、無生物である自然界にも及んだことに注目してください。その理由は、アダムが地上の創造物の支配者（統治者）として、自然と神聖の中で霊的な関係を持っていたからです。

神はまた言われた、「我々のかたちに、我々にかたどって人を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地のすべての獣と、地のすべての這うものごとを治めさせよう」。…神は彼らを祝

福して言われた、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ」。創世記 1 章 26, 28 節

アダムが墮落した後、地球とそこにあるすべてのものは、彼の神への反逆を反し出し始めました。これが、動物の獐猛さや有毒な雑草の繁茂といった現象の根本的な理由です。

更にアダムに言われた、「あなたが妻の言葉を聞いて、食べるなど、わたしが命じた木から取って食べたので、地はあなたのためにのろわれ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。地はあなたのために、いばらとあざみとを生じ、あなたは野の草を食べるであろう。創世記 3 章 17~18 節

神の計画の中において、この地とそこにあるすべてのものは、人間の鏡であります。神は、人が自然界に起こる出来事を見て、自らと神との関係や罪による義において何か問題があることに気づけるように、そうされたのです。自然界の混乱は、人の内なる混乱の現れであり、それは人が目に見えるかたちで問題の存在を認識し、悔い改めるための助けとして存在しています（ちょうど、私たちの身体が痛みを通して異常を知らせるのと同じように）。もし人が神と調和して生きていれば、大地もまた良い実をもたらすことでそれに応えていたでしょう。これが、イスラエルを取り囲む諸国が偶像礼拝に固執し続けたとき、彼らが住んでいた大地から自分たちの反乱が返ってきた理由です。

その地もまた汚れている。ゆえに、わたしはその悪のためにこれを罰し、その地もまたその住民を吐き出すのである...これは、あなたがたがこの地を汚して、この地があなたがたの先にいた民を吐き出したように、あなたがたをも吐き出すことのないためである。レビ記 18 章 25 節、28 節

大地もまた、神の敵によってそこにまかれたものを明らかにします。

僕たちがきて、家の主人に言った、「ご主人様、畑におまきになったのは、良い種ではありませんでしたか。どうして毒麦がはえてきたのですか」。主人は言った、「それは敵のしわざだ」。マタイによる福音書 13:27~28 節

主の畑に敵として現れたのはサタンであり、最初の人類の墮落の後、彼はこの世を自らの所有地であるかのように振る舞い始めたのです。

ある日、神の子たちが来て、主の前に立った。サタンも来てその中にいた。主は言われた、「あなたはどこから来たか」。サタンは主に答えて言った、「地を行きめぐり、あちらこちら歩いてきました」。ヨブ記 1 章 6～7 節

それから、悪魔は彼（イエス）を高い所へ連れて行き、またたくまに世界のすべての国々を見せて言った、「これらの国々の権威と栄華とをみんな、あなたにあげましょう。それらはわたしに任せられていて、だれでも好きな人にあげてよいのですから。それで、もしあなたがわたしの前にひざまずくなら、これを全部あなたのものにしてあげましょう」。ルカによる福音書 4 章 5-7 節

わたし（イエス）はもはや、あなたがたに、多くを語るまい。この世の君（サタン）が来るからである。だが、彼はわたしに対して、なんの力もない。ヨハネによる福音書 14 章 30 節

そのため、アダムが墮落して以来、地はアダムの神への反逆の性質を、新しい主人であるサタンの影響を通して映し出すようになりました。

## 洪水は同じ原理で動作する

もしキリストを通して与えられる神の恵みがなかったなら、サタンはすべての被造物を破壊していたでしょう。サタンが人々を利用するのは、彼らが彼の哲学、すなわち罪の代弁者となったときだけです。そのため、洪水以前の時代には、人々が彼の性質を反映していたことをサタンは喜んでいました。人々は自分たちの罪に深く結びつき、罪を自らのものとして確認し合った結果、世界中におけるキリストによる神の支えの力が退いてしまう状況に至ったのです。

そこで主は言われた、「わたしの霊はながく人の中にとどまらない。彼は肉にすぎないのだ。しかし、彼の年は百二十年であろう」。創世記 6 章 3 節

洪水以前の人々は、ノアを通じた神のあわれみの招きを拒み、キリストの御霊による懇願にも反論していました。神は、このまま悪の道が深まると、120年後には人々は彼ら自身の内にあるキリストを完全に十字架にかけ、キリストにある神の支えの力が取り去られ、十字架にかけられ、地は彼らの墮落の性質を余すことなく現すことが許されることとなります。

彼らはこれを故意に知らずにいるのです。すなわち、神の言葉によって、昔、天が造られ、地は水から現れ、水の上にあったのです。その結果、当時の世界は水で覆われて滅びました。しかし、今の天と地も同じ言葉によって保たれ、火に備えて蓄えられ、神を知らない人々の裁きと滅びの日に備えられているのです。 *ペテロの手紙 第二 3章5～7節*

洪水以前の人々は、キリストの力が世界のあらゆる要素を動かしていることを理解していませんでした。彼らは、自然界の働きは自然そのものに内在する力によって維持されていると考えており、ノアが告げた洪水の警告は非合理に思えたのです。しかし聖書は、万物を支えている力は、キリストー生ける神の言葉である—と教えています。ペテロは、かつて水の洪水をもたらしたのと同じ原理が、千年期の後に起こる火の洪水をも引き起こすことを示しています。前者が生ける御言葉であるキリストを人々が十字架につけたことによって引き起こされたように、後者もまた同様の過程によって生じるのです。人々の心は、キリストの訴えを完全に拒絶し、完全に頑なになっていました。神の御霊に対する彼らの最後の反応は、それを殺そうとする激しい反発でした。洪水前の人々の罪によって神の御霊が締め出され（押し流され）ていったことこそが、あの洪水の原因だったのです。

あなたは悪しき人々が踏んだ古い道を注意深く見たか。時がこないうちに取り去られ、その基は川のように押し流された。彼らは神に言った、われわれを離れてくださいと、また全能者は彼らに何をなしえようかと。 *ヨブ記 22章15～17節*

これは創世記6章を注意深く読むことで明らかになります。

そして神はノアに言われた。「すべての肉なる者の終わりが、わたしの前に来ている；地は彼らのゆえに暴虐で満ちているからだ；見よ、わたしは彼らとともに地を破壊する。あなたはゴ

フェルの木で箱舟を作りなさい。箱舟の中に部屋を設け、アスファルトで内と外を塗りなさい。」*創世記* 6 章 13～14 節

ストロング辞典でヘブライ語の「破壊する」という言葉を調べると、それは以下の意味を持つことがわかります。

H 7843：原始語根；腐敗する、すなわち（使役的に）滅ぼす（文字通りまたは比喩的に）一打ち壊す、捨て去る、墮落させる（者・物）、**破壊する**（者・破壊）、失う、損なう、滅びる、こぼす、荒らす者、完全に X する、浪費する（者）。

この同じ言葉は、ちょうど 13 節の直前の節でも使われています。

地は神の前に**墮落**[H7843]し、地は暴虐で満ちていた。(12)神が地を見られると、それは**墮落**[H7843]していた；すべての人が地の上でその道を墮落させたからである。*創世記* 6 章 11～12 節

もし、この同じヘブライ語に対して、*創世記* 6 章 13 節で翻訳者たちが用いた **破壊する**を当てはめるなら、本文は次のようになります。

地は神の前に**破滅**し、地は暴虐で満ちていた。神が地を見られると、それは**破滅**していた；すべての人が地の上でその道を破滅させたからである。*創世記* 6 章 11～12 節

地そのものが、人間の不道德と暴虐によって汚されていました。そのため神は、終末の段階において地が人間の反逆を表すことを見られました。地は、罪深い住民たちと同じように、自らの敵に報復し、自然な成り行きとして「住民を吐き出し」（*レビ記* 18 章 25～28 節参照）、彼らを破壊したのです。

だからこそ、イエスは地上でのご生涯の時、群衆に向かって次のように言われたのです。

たとい、わたしの言うことを聞いてそれを守らない人があっても、わたしはその人をさばかない。わたしがきたのは、この世をさばくためではなく、この世を救うためである。わたしを捨てて、わたしの言葉を受けいれない人には、その人をさばくものがある。わたしの語ったその言葉が、終りの日にその人をさばくであろう。ヨハネによる福音書 12 章 47～48 節

ここでイエスは、ご自身の言葉に働く裁きの行為から身を分けて示しています。「すべてを支えている（ヘブライ1章3節）」この言葉は、独立した公平な仲裁者であり、人の悪を反映し、悔い改めを拒む者を罰することを示しています。このため、キリストが再び来られるとき、彼は次のように表されます。

またわたしが見ていると、天が開かれ、見よ、そこに白い馬がいた。それに乗っているかたは、「忠実で真実な者」と呼ばれ、義によってさばき、また、戦う方である。その目は燃える炎であり、その頭には多くの冠があった。また、彼以外にはだれも知らない名がその身にしるされていた。彼は血染めの衣をまとい、その名は「神の言」と呼ばれた。そして、天の軍勢が、純白で、汚れのない麻布の衣を着て、白い馬に乗り、彼に従った。その口からは、諸国民を打つために、鋭いつるぎが出ていた。彼は、鉄のつえをもって諸国民を治め、また、全能者なる神の激しい怒りの酒ぶねを踏む... 啓示録 19章11～15節

## 律法の鏡

イエスは父なる神の御品性を表す代表として再び来られます。生ける神の言葉として、イエスは神の愛の律法の原則を体現されています。ところが、この悔い改める罪人を救う働きをする同じ愛が、同時に悪者にとっては「死をもたらず香り」や「致命的な香り」となってしまうのです。

しかるに、神は感謝すべきかな。神はいつもわたしたちをキリストの凱旋に伴い行き、わたしたちをとおしてキリストを知る知識の香りを、至る所に放って下さるのである。わたしたちは、救われる者にとっても滅びる者にとっても、神に対するキリストの香りである。後者にとっては、死から死に至らせる香りであり、前者にとっては、命から命に至らせる香りである。いったい、このような任務に、だれが耐え得ようか。コリント人への第二の手紙 2章14～16節

義人にとって命を与える神の同じ愛は、悪人にとっては死をもたらずものと

なります。愛そのものの性質は変わりません。二つの階級の人々にとって同じ「香り」であるが、その影響はそれが現される相手によって異なるのです。この過程は、悪人が神をありのままに完全なる無私的愛として-見るときに説明されます。この存在の光の中で、彼らの罪は真の大きさをもって示されます。自己欺瞞は純粋な真理の光によって一掃され、その結果、罪の致命的な報いが彼らに降りかかるのです。それは「罪の報酬は死である」（ローマ 6 章 23 節）という言葉を確認させるのです。しかし神は死の源ではありません。したがって、罪が悪人を焼き尽くすことを許すことによって、死そのものが存在しなくなるのです。

それから、死も黄泉も火の池に投げ込まれた。この火の池が第二の死である。ヨハネの黙示録 20 章 14 節

もし神がこの裁きの直接の執行者であるならば、死は神のうちに不滅になるでしょう。しかし、私たちは天の父のうちにはいかなる暗闇も存在しないことを知っています。

あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は、上から、光の父から下って来る。父には、変化とか回転の影とかいうものはない。ヤコブの手紙 1 章 17 節

わたしたちがイエスから聞いて、あなたがたに伝えるおとずれは、こうである。神は光であって、神には少しの暗いところもない。ヨハネの第一の手紙 1 章 5 節

なぜ人間にとって、創造が罪にどのように応答し、反応するのかを理解することがそれほど難しく、そのために神を破壊者として誤解してしまうのでしょうか。それは、私たち自身がキリストの心を持たない限り、小さな破壊者となり、破壊者の肉なる父サタンのかたちには造られてしまうからです（ヨハネ 8 章 44 節、黙示録 9 章 11 節）。私たちは律法と律法を守る者を見て、鏡に映る自分の顔を見るのです。

おおよそ御言を聞くだけで行わない人は、ちょうど、自分の生れつきの顔を鏡に映して見る人のようである... ヤコブの手紙 1 章 23 節

律法の鏡のような性質については、聖書の中に多くの例が示されています。イエスは、弟子たちが民族的偏見という国民的な罪を抱えていたとき、その

ような過程が育まれることを許されたのです。

さて、イエスはそこを出て、ツロとシドンとの地方へ行かれた。すると、そこへ、その地方出のカナンの女が出てきて、「主よ、ダビデの子よ、わたしをあわれんでください。娘が悪霊にとりつかれて苦しんでいます」と言って叫びつづけた。しかし、イエスはひと言もお答えにならなかった。そこで弟子たちがみもとにきて願って言った、「この女を追い払ってください。叫びながらついてきていますから」。するとイエスは答えて言われた、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外の者には、つかわされていない」。しかし、女は近寄りイエスを拝して言った、「主よ、わたしをお助けください」。イエスは答えて言われた、「子供たちのパンを取って小犬に投げてやるのは、よろしくない」。すると女は言った、「主よ、お言葉どおりです。でも、小犬もその主人の食卓から落ちるパンくずは、いただきます」。そこでイエスは答えて言われた、「女よ、あなたの信仰は見あげたものである。あなたの願いどおりになるように」。その時に、娘はいやされた。マタイによる福音書 15 章 21～28 節

この場面において、神の生ける律法／御言葉としての立場から、イエスは弟子たちの人種的偏見を彼ら自身に映し返されました。それは彼らに自らの罪を悟らせるためであり、またユダヤ人のメシアに対して自らの偏見を乗り越えなければならなかったシドンの女の信仰を試すためでもありました。ここで私たちは、律法が神の真の御品性を映し出すのではなく、弟子たちの罪深い思いを映し出していたことが分かります。なぜなら弟子たちは律法を聞くだけで実行していなかったからです。

そして、御言を行う人になりなさい。おのれを欺いて、ただ聞くだけの者となってはいけません。おおよそ御言を聞くだけで行わない人は、ちょうど、自分の生れつきの顔を鏡に映して見る人のようである。ヤコブの手紙 1 章 22～23 節

もう一つの類似した例は、「イエスが語られた金持ちとラザ」の例え話に見出すことができます。

この貧しい人がついに死に、御使たちに連れられてアブラハム

のふところに送られた。金持も死んで葬られた。そして黄泉にいて苦しみながら、目をあげると、アブラハムとそのふところにいるラザロとが、はるかに見えた。そこで声をあげて言った、『父、アブラハムよ、わたしをあわれんでください。ラザロをおつかわしになって、その指先を水でぬらし、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの火炎の中で苦しきもだえています』。ルカによる福音書 16 章 22～24 節

このたとえ話において、キリストは人々の理解に合わせて接していました。当時、多くの人々は死と復活の間に、人は意識をもって存在するという誤った考えを信じていました。しかし聖書はその考えを否定しています。「生きている者は、自分が死ぬことを知っている。しかし、死んだ者は何も知らない...」。伝道の書 9 章 5 節

陰府は、あなたに感謝することはできない。死はあなたをさんびすることはできない。墓にくだる者は、あなたのまことを望むことはできない。イザヤ書 38 章 18 節

それゆえ、人々の理解の欠如のために、イエスは彼らの先入観を鏡のように映し出すことで、重要な真理を教えるように例え話を語られました。この過程の目的は、律法が罪人の思考を映し出すことで、罪人に自らのありのままの姿—神との真の関係の診断—を見つめ、悔い改めへと導き、神の豊かな救いの恵みを受けることができるようにすることです。

Romans 5:20 律法がはいり込んできたのは、罪過の増し加わるためである。しかし、罪の増し加わったところには、恵みもますます満ちあふれた。ローマ人への手紙 5 章 20 節

しかし、罪人が神から与えられたすべての機会を拒み、自らの罪と完全に同一化してしまうとき、律法と同じ反映の働きによって、彼らは自らの罪によって滅びへと導かれることとなります。

彼らは知識を憎み、主を恐れることを選ばず、わたしの勧めに従わず、すべての戒めを軽んじたゆえ、自分の行いの実を食らい、自分の計りごとに飽きる。箴言 1 章 29～31 節

## 十字架の啓示

十字架において、罪がまさに死であることが示されています。神はこのことを初めから宣言されていました。

しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう。創世記 2章 17節

アダムとエバがすぐに死ななかった理由は、キリストがすでに彼らの身代わりとして「世の始めから殺されている小羊」として死を迎え始めておられたからです（黙示録 13章 8節）。実際、キリストは罪の始まり以来、十字架のような死の苦しみを担ってこられたのです。

彼らのすべての悩みのとき、主も悩まれて、そのみ前の使をもって彼らを救い、その愛とあわれみとによって彼らをあがない、いにしえの日、つねに彼らをもたげ、彼らを携えられた。イザヤ書 63章 9節

アダムはサタンの思想を受け入れ、それは善悪の知識の木の実を食べるという行為によって外面的に現れました。この偽りの思想によれば、神は人間の幸福を真に気にかけておらず、神の賜物はただ、人々を御国の支配下に置くための手段にすぎないとされていたのです。

へびは女に言った、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」。創世記 3章 4～5節

## 神の御顔の隠れ

このような考え方によって、アダムとその妻は「死に至らせるのは罪ではなく、神が律法を破った者を殺すのだ」と信じるようになりました。これが、彼らが墮落した後に示した反応を説明しています。

彼らは、日の涼しい風の吹くころ、園の中に主なる神の歩まれる音を聞いた。そこで、アダムとその妻は主なる神の顔を避け

て、園の木の間に身を隠した。創世記 3 章 8 節

この考え方は、アダムのすべての子孫の心に深く刻み込まれました。だからこそ、自然のままの人はカルバリーでの死を神の直接的な行為として見なし、てしまう理由を、より容易に理解できるようになります。

まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみをになった。しかるに、われわれは思った、彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。イザヤ書 53 章 4 節

イエスを十字架で死に至らしめたのは神ではなく罪であり、父なる神の憐れみ深い顔を隠していたのです。

そして三時ごろに、イエスは大声で叫んで、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と言われた。それは「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。  
マタイによる福音書 27:46

ここでイエスは、詩篇 22 篇の冒頭の言葉を語られました。それは千年前に、十字架におけるイエスの体験を予告していたものです。そしてこの詩篇のさらに先では、父なる神が御子から御顔を隠されたのかどうか、その真理が示されています。

主が苦しむ者の苦しみを軽んじ、いとわれず、またこれにみ顔を隠すことなく、その叫ぶときに聞かれたからである。詩篇 22 篇 24 節

父なる神はそこにおられ、御子と共に苦しんでおられましたが、イエスはそれを感じることができませんでした。なぜなら、世の罪の罪悪感が暗闇の中でイエスを包んでいたからです。

神はわたしたちの罪のために、罪を知らない方を罪とされた。それは、わたしたちが、彼にあって神の義となるためなのである。コリント人への第二の手紙 5 章 21 節

さらに、わたしたちが罪に死に、義に生きるために、十字架にかかって、わたしたちの罪をご自分の身に負われた。その傷によって、あなたがたは、いやされたのである。ペテロの手紙 第一 2 章 24 節

しかし、私たちはイエスを見ます...それは、彼が神の恵みによって、すべての人のために死を味わわれるためであった。ヘブライ人への手紙 2章9

神の御顔は、愛する御子から隠されているかのように見えました。なぜなら、まさにその瞬間、キリストは罪を負う者となられていたからです。

ただ、あなたがたの不義があなたがたと、あなたがたの神との間を隔てたのだ。またあなたがたの罪が主の顔を覆ったために、主はお聞きにならないのだ。イザヤ書 59章2節

神は御子を愛することをやめられませんでした。神は愛であり、ご自身の存在も御品性も変わることはありません。

...主は、「わたしは、決してあなたを離れず、あなたを捨てない」と言われた。ヘブル人への手紙 13章5節

主は恵み深く、そのいつくしみは限りなく、そのまことはよろず代に及ぶからである。詩篇 100篇5節

罪を負う者の視点からのみ、天の父の憐れみ深い御品性は見えなくなります。なぜなら、罪の思想がそれを覆い隠してしまうからです。神から切り離され、罪の結果に委ねられるこの状態こそが神の怒りです。これは決して神の御品性が変わり、忍耐が尽きて憐れみをやめられるということではありません。これは罪人が神をそのように見てしまうのです。私たちはカインが兄を殺した後に、この思いをどのように表現しているのかを見ることができます。

そしてカインは主に言った、「わたしの罰は重くて負いきれません。」（余注：わたしの罪は、赦しを受けるには重すぎる。）  
創世記 4章13節

翻訳者の余注は、ヘブライ語の原文にカインは自分の罪は許されないと考えたという意味が含まれていることを示しています。この理解は、ダウエイ・リームズ 1899年アメリカ版やウィクリフの翻訳にも同様に訳されています。

そしてカインは主に言った、「私の罪は赦されるにはあまりにも重すぎる。」 創世記4章13節 (ダウエイ・リームズ)

そしてカインは主に言った、「私の罪は赦しを受けるには大き

すぎる。創世記4章13節 (ウィクリフ)

アダム・クラークは創世記4章13節について次のように述べています。

原文は「私の罪は赦されるにはあまりにも大きいのか。」と訳すことができるでしょう。これは、カインが深い絶望の瀬戸際で口にした言葉であったと考えられます。ヘブライ語の *avon* は、罰よりもむしろ罪を意味する可能性が高く、この語はレビ記26章41節、26章43節、サムエル記上28章10節、列王記下7章9節などで用いられています。また、ヘブライ語 *nasa* は「赦す」「許す」を意味します。したがって、本文よりも余注の読みの方が妥当であるといえます。

これこそが罪の思考です。罪はこのような欺きによって人を殺し、神の律法を利用するのです。

そして、いのちに導くべき戒めそのものが、かえってわたしを死に導いて行くことがわかった。なぜなら、罪は戒めによって機会を捕え、わたしを欺き、戒めによってわたしを殺したからである。ローマ人への手紙 7:10-11

定めをもって危害をたくらむ悪しき支配者はあなたと親しむことができるでしょうか。詩篇 94 篇 20 節

罪のすべての重みが、その恐ろしく誤った思考と理解とともにイエスの上のしかかり、彼の魂を打ち砕き、愛する父の御顔を覆い隠しました。

わが神よ、わたしが昼よばわっても、あなたは答えられず、夜よばわっても平安を得ません。しかし、わたしは虫であって、人ではない。人にそしられ、民に侮られる。すべてわたしを見る者は、わたしをあざ笑い<sup>1</sup>、くちびるを突き出し、かしらを振り動かして言う、「彼は主に身をゆだねた、主に彼を助けさせよ<sup>2</sup>。主は彼を喜ばれるゆえ、主に彼を救わせよ」と。わたしは水のように注ぎ出され、わたしの骨はことごとくはずれ、わたしの心臓は、ろうのように、胸のうちで溶けた。わたしの力は

---

<sup>1</sup> マタイによる福音書 27 章 28～31 節参照

<sup>2</sup> マタイによる福音書 27 章 43 節参照

陶器の破片のようにかわき、わたしの舌はあごにつく<sup>3</sup>。あなたはわたしを死のちに伏させられる。まことに、犬はわたしをめぐり、悪を行う者の群れがわたしを囲んで、わたしの手と足を刺し貫いた。彼らは互にわたしの衣服を分け、わたしの着物をくじ引にする<sup>4</sup>。詩篇 22 篇 2 節、6～8 節、14～16 節、18 節

この出来事が起こるまで、罪の実が「きっと死ぬであろう」（創世記 2 章 17 節）であることが明らかになりませんでした。イエスが経験するまで、罪によってもたらされる最終的な死の完全な闇に陥った人は一人もいませんでした。そして、イエスが死んだ後も、そのような死を経験した人もいません。イエスの犠牲を拒む人々は、千年の終わり、第二の復活の時に、イエスが感じられたその感情を理解することになるのです。

イエスが死なれたような死を遂げた者は、これまで誰一人としていません。そのため聖書は、イエスを「死人のうちから最初にもうけられた者」あるいは「死人のうちから最初に生まれた者」と呼んでいます。これは、イエスが年代的に最初に墓からよみがえった者ではないにもかかわらず、そう記されているのです。

また、忠実な証人、死人の中から最初に生れた者であるイエス・キリストから... 啓示録 1 章 5 節

彼はまた、そのからだなる教会のかしらである。彼は初めの者であり、死人の中から最初に生れたかたである。それは、ご自身がすべてのことにおいて第一の者となるためである。コロサイ人への手紙 1 章 18 節

聖書は、人類の歴史上のすべての人が経験してきた死を、絶対的な死とは見なしていません—それは単なる無意識の眠りにすぎないのです。

また地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者は目をさますでしょう。そのうち永遠の生命にいたる者もあり、また恥と、限りなき恥辱をうける者もあるでしょう。ダニエル書 12 章 2 節

不義の者でさえ眠っている者として描かれています。なぜなら、これは究極

---

<sup>3</sup> ヨハネによる福音書 19 章 28 節参照

<sup>4</sup> マタイによる福音書 27 章 35 節参照

の死ではないからです。さらに、眠っている義人についてのイエスの言葉は、より強い表現で語られています。

また、死人の復活については、神があなたがたに言われた言葉を読んだことがないのか。「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」と書いてある。**神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。** *マタイによる福音書 22 章 31～32 節*

イエスは彼女に言われた、「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」。 *ヨハネによる福音書 11:25, ~26 節*

## 裁き

私たちを愛する父なる神は、私たちの罪によってもたらされる死、すなわち、ご自身の尊い御子が一つの罪も犯さなければ復活することのなかった死に、御子をお渡しになりました。この行いは、私たちが御子にふさわしい扱いすなわち永遠に生きることを受けられるようにするためです。けれども、神は誰にも御子の身代わりの死を受け入れることを強制されません。そのため、**第二の死が存在するのです。**

また見ていると、大きな白い御座があり、そこにいます方があった。天も地も御顔の前から逃げ去って、あとかたもなくなった。また、**死んでいた者が**、大いなる者も小さき者も共に、御座の前に立っているのが見えた。かずかずの書物が開かれたが、もう一つの書物が開かれた。これはいのちの書であった。死人はそのしわざに応じ、この書物に書かれていることにしたがって、さばかれた。海はその中にいる死人を出し、死も黄泉もその中にいる死人を出し、そして、**おのおのそのしわざに応じて、さばきを受けた。**それから、死も黄泉も火の池に投げ込まれた。**この火の池が第二の死である。** *ヨハネの黙示録 20 章 11～14 節*

この聖句は、悪者を焼き尽くす火の描写の直後に記されており、私たちの研究の主題であります。これは、別の形でその出来事を繰り返しているため、これらの聖句の説明として現れています。それは、裁きが大きな白い御座に座っておられる方の性格の顕れから来ることを示しています。さらに重要なのは、裁きを受ける者は死んだ者と呼ばれる（たとえ彼らが復活した後でも）点に注意することです。これは彼らが「罪過と罪とによって死んでいた」（エペソ 2 章 1 節、2 節、5 節）からです。したがって彼らの裁きは、すでに霊的に起こっていたことの表れにすぎません。死と黄泉も火の池に投げ込まれます。これは裁きが神ご自身によって直接執行されることができないことを意味します。さもなければ、神ご自身において死は火の湖に投げ込まれるのではなく、不滅のものとなってしまおうでしょう。結局、この人々への裁きは、彼らがキリストの身代わりの死を受け入れることを拒んだ結果なのです。つまり、キリストの十字架の死は、彼らの死と非常に似ていることを意味します。なぜなら、彼らもまた、自らの罪に消尽されて死ぬからです。

そして、彼（祭司）はその雄牛を宿営の外に携え出し、はじめの雄牛を焼き捨てたように、これを焼き捨てなければならない。これは会衆の罪祭である。レビ記 4 章 21 節

なぜなら、大祭司によって罪のためにささげられるけもの血は、聖所のなかに携えて行かれるが、そのからだは、宿営の外で焼かれてしまうからである。だから、イエスもまた、ご自分の血で民をきよめるために、門の外で苦難を受けられたのである。ヘブライ人への手紙 13 章 11～12 節

宿営の外側又は外とは、罪を負う者が父なる神のあわれみ深い御顔を見ることのできない場所を意味しています。

その患部が身にある日の間は汚れた者としなければならない：彼は不浄である；その人は汚れた者であるから、離れて住まなければならない。すなわち、そのすまいは宿営の外でなければならない。レビ記 13 章 46 節

あの、のろいごとを言った者を宿営の外に引き出し、それを聞いた者に、みな手を彼の頭に置かせ、全会衆に彼を石で撃たせなさい。レビ記 24 章 14 節

イエスはこの場所について次のように語ります。

そして主人は立腹して、**負債全部**を返してしまうまで、彼を獄吏に引きわたした。あなたがためいめいも、もし心から兄弟をゆるさないならば、**わたしの天の父もまたあなたがたに対して、そのようになさるであろう。** *マタイによる福音書 18章 34～35 節*

炉の火に投げ入れさせるであろう。そこでは泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう。 *マタイによる福音書 13章 42 節*

そこで、王はそばの者たちに言った、「この者の手足をしぼって、外の暗やみにほうり出せ。そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう。」 *マタイによる福音書 22章 13 節*

霊的暗闇とは、罪人が罪の思想と一体化しすぎて、もはや神の本質からの光を見ることも感じとることもできなくなった状態を指します。イエスがこの場所／状態について語る場面では、裁きは常に別の存在を通して行われます。たとえば「苦を与える者」や「しもべ」が「彼らを縛り」そして「投げ込む」と描写されており、神ご自身が死刑宣告の直接の執行者ではないことが示唆されています。これは神の栄光に満ちた愛の御前で、**彼ら自身の罪**によって行われるのです。

**悪は悪しき者を殺す。正しい者を憎む者は罪に定められる。** *詩篇 34 篇 21 節*

誠実な者は、その正義によって、その道をまっすぐにせられ、**悪しき者は、その悪によって倒れる。正しい者はその正義によって救われ、不信実な者は自分の欲によって捕えられる。** *箴言 11 章 5～6 節*

見よ、彼（悪しき者）は邪悪をはらみ、害毒をやどし、偽りを生む。彼は穴を掘って、それを深くし、**みずから作った穴に陥る。**その害毒は自分のかしらに帰り、その強暴は自分の**こうべ（頭）**に下る。 *詩篇 7 篇 14～16 節*

もろもろの国民は**自分の**作った穴に陥り、隠し設けた網に自分の足を捕えられる。主はみずからを知らせ、さばきを行われた。

悪しき者は自分の手で作ったわなに捕えられる。詩篇 9 篇 15  
～16 節

まちがってはいけない、神は侮られるようなかたではない。人は自分のまいたものを、刈り取ることになる。すなわち、自分の肉にまく者は、肉から滅びを刈り取り、霊にまく者は、霊から永遠の命を刈り取るであろう。ガラテヤ人への手紙 6 章 7  
～8 節

十字架の光に照らして見ると、神の怒りは多くの人が想像しているものとはまったく異なることが分かります。

わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっていると主は言われる。イザヤ書 55 章 8 節

人の怒りは、神の義を全うするものではないからである。ヤコブの手紙 1 章 20 節

これが神の怒りについての聖書的な定義の一つです。

人々にむかって、「安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」と言われた。彼らは黙っていた。イエスは怒りを含んで彼らを見まわし、その心のかたくななのを嘆いて、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。そこで手を伸ばすと、その手は元どおりになった。マルコによる福音書 3 章 4～5 節

イエスの怒りは、人々の心が頑なになっていることによる悲しみから生じています。それは人を滅ぼすような怒りではありません。なぜなら、第六の戒めを破ることであり、イエスご自身の性質にもそぐわないからです。イエスの怒りは、彼の子供たちが罪によって自らをイエスから引き離し、その結果として祝福を受けられなくなり、最終的には命の源から自分自身を切り離して、死に至ってしまうという事実から来る悲しみでした。そしてその直後にイエスが行われたことは、殺すことではなく、萎えた手をもつ人をあわれみ深く癒やすことでした。

では、十字架の神秘は、千年期の後に悪しき者たちがどのように死に至るの

かについて、私たちに何を示しているのでしょうか。キリストを死に至らしめたものは、釘や鞭による肉体的苦痛ではありませんでした。世界の罪の重荷を負うことによって生じた魂の激しい苦悩は、肉体の痛みをはるかに超えるものでした。

まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみをになった...われわれはみな羊のように迷って、おのおの自分の道に向かって行った。主はわれわれすべての者の不義を、彼の上におかれた。彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、口を開かなかった。ほふり場にひかれて行く小羊のように、また毛を切る者の前に黙っている羊のように、口を開かなかった。イザヤ書 53 章 4 節, 6~7 節

そして彼（イエス）は、ペテロとゼベダイの子ふたりとを連れて行かれたが、悲しみを催した悩みははじめられた。そのとき、彼らに言われた、「わたしの心は悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、わたしと一緒に目をさましていなさい」。マタイによる福音書 26 章 37~38 節

悪しき者の死も非常に似ているでしょう。

彼らの心は、待ち伏せの間に、かまどのごとく熱をたくわえる。パン焼きの者は夜を通して眠るが、朝になれば、そのかまどは燃えさかる炎のように燃え上がる。ホセア書 7 章 6 節

また日と月と星とに、しるしが現れるであろう。そして、地上では、諸国民が悩み、海と大波とのとどろきにおじ惑い、人々は世界に起ろうとする事を思い、恐怖と不安で気絶するであろう。もろもろの天体が揺り動かされるからである。ルカによる福音書 21 章 25~26 節

私たちはまた、キリストが受けられた肉体的な苦しみは、神ではなくサタンによって引き起こされたことも、サタンがユダの心に入りキリストを裏切らせた事実から分かります（ルカ 22 章 3~4 節、ヨハネ 13 章 21~27 節）。死の力を持つのはサタンである（ヘブル 2 章 14 節、国際標準版聖書）。彼こそがその源だからです。

実際、神の聖なる律法の光の前で、自らの罪によって死ぬという点において、

彼らの死はキリストの死とまったく同じである。キリストは、この種類の死によって最初に死んだ方であり、それによって、だれもその死を経験する必要がありません。-謎はなくなり、罪の結果は、すべての者に明らかに示されたのです。キリストの死と悪しき者たちの死との唯一の違いは、キリストが父なる神の憐れみを信仰によって保持することができ、詩篇 16 篇 10~11 節を信じている点であり、したがって、罪が彼を御父から引き離すことがなかったということです。

あなたは、私のたましいを黄泉に捨て置かず、あなたの聖なる者を、朽ち果てさせることもない。私にいのちの道を知らせ、御顔によって私を喜びで満たしてください。使徒の働き 2 章 27  
~28 節

私たちのすべての罪がのしかかり、闇の中にいるとき、神のあわれみへのこの信仰を、イエスが私たちに与えてくださいます。まさにここで、イエスは世の頑なな心に打ち勝たれました。一方、罪人は、その隔たりが完全であり、神が自分の魂を黄泉に置き去りにされると信じています。

## 火の神聖なパターン

イエスが受けられた肉体的・精神的な苦しみは、源と通路という神の定めた型に従っています。

それは彼らが、心を励まされ、愛によって結び合わされ、豊かな理解力を十分に与えられ、神の奥義、すなわち父なる神（源）とキリスト（通路）を知るに至るためである。キリストのうちには、知恵と知識との宝が、いっさい隠されている。コロサイ人への手紙 2 章 2~3 節

しかし、わたしたちには、父なる唯一の神のみがいますのである。万物はこの神から出て、わたしたちもこの神に帰する。また、唯一の主イエス・キリスト（通路）のみがいますのである。万物はこの主により、わたしたちもこの主によっている。コリント人への第一の手紙 8 章 6 節

神（源）は、むかしは、預言者たちにより、いろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られたが、この終りの時には、御子（通路）によって、わたしたちに語られたのである。神は御子を万物の相続者と定め、また、御子によって、もろもろの世界を造られた。御子（キリスト）は彼（神）の栄光の輝きであり、彼の本質の真の姿である... ヘブライ人への手紙 1章 1～3 節

目に見えない神は、その御子である私たちの主イエス・キリストを通して現されました。神によって生み出されたキリストは、御父の栄光を現し、それを高く掲げます。この関係の型を通して、十字架におけるキリストの肉体的（可視的）苦しみと霊的（不可視的）苦しみとの関係を、より深く理解することができます。この型から導かれる結論は、キリストの苦しみの源は、肉体的な虐待ではなく罪であったということです。キリストは、魂を押しつぶす罪の罪責によって死なれたのであり、十字架の肉体的苦痛そのものによって死なれたわけではありません。そのため、ピラトがイエスの死があまりにも早かったことに驚いたのです。肉体的には、もっと長くかかるはずだったので（マルコ 15 章 44 節）。実際、イエスの隣にいた二人の犯罪者は、イエスが息を引き取った時点でもまだ生きており、死を早めるために脚を折られる必要があった（ヨハネ 19 章 31～33 節）。

肉体的な苦しみは、ただ彼の魂の苦悩の表れにすぎませんでした。したがって、第二の死に至る者たちにとって、苦しみの源は霊的なものであり—それは愛する父なる神とその御子の御前で自らの罪が燃え尽きる炎によるものです。つまり、霊的な苦しみは罪責感から生じ、肉体的な苦しみは悪魔的な怒りの表れなのです。

これは、旧約聖書のいけにえの儀式においても、このことが示されています。罪を犯した者は自ら動物を殺し、その後、そのいけにえは祭壇の火によって焼き尽くされました。この象徴が示しているのは、苦しみと死の源が、いけにえを焼いた物理的な火そのものではなく、罪に対する罪責感という霊的な経験にあるということです。無実のいけにえに対して罪を告白し、自らの手でその命を絶つという行為を通して、罪人は自分の罪こそがキリストを死に至らしめたのだと悟るべきです。また、神がエリヤに対して、主は火の中にはおられなかったと告げられたことも、私たちは知っています。

主は言われた、「出て、山の上で主の前に、立ちなさい」。その時主は通り過ぎられ、主の前に大きな強い風が吹き、山を裂き、岩を砕いた。しかし主は風の中におられなかった。風の後には地震があったが、地震の中にも主はおられなかった。地震の後に火があったが、火の中にも主はおられなかった。火の後に静かな細い声が聞えた。列王記上 19 章 11～12 節

しかし、イスラエルの民がシナイに来たとき、彼らは主の栄光を焼き尽くす火として感じ取りました。

主の栄光は山の頂で、燃える火のようにイスラエルの人々の目に見えた。出エジプト記 24 章 17 節

彼らの神に対する誤った認識は彼ら自身を欺き、その欺きによって恐れが心に生じ、最終的には荒野で命を落とすことになりました（民数記 14 章 20～29 節）。このように、焼き尽くす火とは、罪人が裁きをどう受け取るかという認識に対する反応なのです。神ご自身が火の中におられるのではなく、神の臨在が、罪人の怒りを火として現すのです。罪は戒めによって機会を得て、罪人を死に至らしめます。

わたしはかつては、律法なしに生きていたが、戒めが来るに及んで、罪は生き返り（正体が暴かれ）、わたしは死んだ。そして、いのちに（導く）べき戒めそのものが、かえってわたしを死に導いて行くことがわかった。なぜなら、罪は戒めによって機会を捕え、わたしを欺き、戒めによってわたしを殺したからである。ローマ人への手紙 7 章 9～11 節

十字架の上でキリストは言葉の剣によって死なれました。その剣は、イエスご自身が負われた全世界の罪の罪責を映し出していました。

というのは、神の言は生きていて、力があり、もろ刃のつるぎよりも鋭くて、精神と靈魂と、関節と骨髄とを切り離すまでに刺しとおして、心の思いと志とを見分けることができる。ヘブル人への手紙 4 章 12 節

たとい、わたしの言うことを聞いてそれを守らない人があっても、わたしはその人をさばかない。わたしがきたのは、この世をさばくためではなく、この世を救うためである。わたしを捨

てて、わたしの言葉を受けいれない人には、その人をさばくものがある。わたしの語ったその言葉が、終りの日にその人をさばくであろう。ヨハネによる福音書 12 章 47～48 節

同じように、千年期の後、悪しき者たちは神の素晴らしい御品性の前で、自らの罪の本質を完全に悟ることによって、魂の苦しみから滅び、彼らの肉体が物理的な火によって焼き尽くされることは、あくまでも外的に現れたものにすぎません。内なる罪責感と魂の火は、やがて文字通りの火として現れるのです。これは私たちに神の定められた型を教えています。つまり、物理的な火の直接の源は神ではなく、神の愛ある御品性に対する罪人自身の罪責の反応である、という事実が確認されるのです。

神の御言葉が、肉の人が神を殺人者のように見る形で悪しき者に対する神の裁きを示す目的は、私たちが父なる神について抱いている罪深い思い込みを暴き、悔い改めへと導くためなのです。

千年期の終わりに、キリストは恐るべき威厳をもって降臨し、悪しき者たちを墓から死者を呼び起こされます（黙示録 20 章 5 節）。それは「裁きの復活」（ヨハネ 5 章 29 節）へと至るためです。悪者たちは、墓に入ったときと同じように、キリストへの敵意と反逆の霊をそのまま抱いてよみがえります。私たちは、次にキリストを見るとき、キリストは「人の子は父の栄光のうちに、御使たちを従えて来るが、その時には、実際のおこないに応じて、それぞれに報いるであろう。」（マタイ 16 章 27 節）ことを知っています。始めのうち、者たちは、この栄光の外面的な現れしか目にせず、これによって、彼神の義を、イスラエルの民がシナイ山で神の栄光を認めたのと同じように認めます。この栄光は、彼らが通常なら決して口にしないような言葉を、彼らの口から引き出します。

すなわち、「主が言われる。わたしは生きている。すべてのひびきは、わたしに対してかがみ、すべての舌は、神にさんびをささげるであろう」と書いてある。ローマ人への手紙 14 章 11 節

しかし、これは悔い改めではありません。彼らに対するあわれみが訴えることをやめたのは、神が赦せないからでも、赦そうとされないからでもなく、彼ら自身が神よりも罪を選び続けたため、真実の悔い改めを経験できない状態にまで至ってしまったからです。もし彼らに第二の試練が与えられたとし

でも、最初のときと同じように、神の律法、その定めと裁きから逃れることに費やされ、神に対する反抗を引き起こすでしょう。

ヨハネの黙示録 20 章 7～9 節では、サタンが悪しき者たちを説き伏せて、贖われた者たちがいる黄金の都—新しいエルサレム—に侵入させ、彼らの心にキリストに対する自らの憎しみの霊を吹き込みます。その無数の軍勢は、開かれた門を無視して街を征服しようと準備を整えます。彼らの行動そのものが、彼らが決して悔い改めないことを完全に証明しているのです。

サタンと、彼に関わるすべての者たちは、反逆の生き方によって神とその真の性格からあまりにも調和しない状態に置いていたため、神の存在そのものが彼らにとっては焼き尽くす火となるのです。パウロは申命記 4 章 24 節を引用して、「私たちの神は焼き尽くす火である」（ヘブル 12 章 29 節）と書きました。つまり、彼らを滅ぼすのは、愛である神の栄光なのです。では、その「神の栄光」とは何でしょうか。

（モーセ）は言った、「どうぞ、あなたの栄光をわたしにお示しください」。そして彼（主）は言われた、「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ、主の名（性質）をあなたの前にのべるであろう。わたしは恵もうとする者を恵み、あわれもうとする者をあわれむ」。出エジプト記 33 章 18～19 節  
ときに主は雲の中であって下り、彼と共にそこに立って主の名（性質）を宣べられた。主は彼の前を過ぎて宣べられた。「主、主なる神、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かである。」出エジプト記 34 章 5～6 節

神の栄光とは、愛の御品性そのものです。その神の完全な愛の本質、すなわちその御善は、悪しき者たちを滅ぼすものとなります。神の聖くあわれみ深い性質の現れは、罪の本当の姿が明らかにし、その破壊的な特徴を完全に暴きます。（ローマ 12 章 19～20 節を参照）

愛する者たちよ。自分で復讐をしないで、むしろ、神の怒りに任せなさい。なぜなら、「主が言われる。復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する」と書いてあるからである。むしろ、「もしあなたの敵が飢えるなら、彼に食わせ、かわくなら、彼に飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼

の頭に燃えさかる炭火を積むことになるのである」。

この聖句をどのように読むべきでしょうか。ここで神は、敵に悪を行わないように教えているのでしょうか。なぜなら、私たちが敵に悪を行えば、神がそれを行う機会を奪ってしまうからです。もし私たちが行えば悪となることを、神がまったく同じように行った場合、その悪事は突然「善」になるのでしょうか。そのような読み方は、むしろ私たち人間の考え方を反映しているにすぎません。「神の道は、私たちの道よりも高い」（イザヤ 55 章 8～9 節）とあるように、神の復讐や怒りは、私たちが同じ状況で従うように教えられている助言、すなわち、悪く扱う者に善を行うという教えとは異なる形で現れるのでしょうか。もしそうであるなら、神はご自身が行わないことを私たちに求めていることになりません。私たちは怒りを抑えなければなりません、神は望むときに怒りを解き放つことが許されているのでしょうか。イエスは、神が私たちに敵を愛を持って扱うよう求めていると言われます。なぜなら、そうすることによって、私たちが神の子であり、神の御心と御品性を行っていることを示すからです。

求める者には与え、借りようとする者を断るな。『隣り人を愛し、敵を憎め』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。敵を愛し、のろう者を祝福し、憎む者に善を行い、迫害する者のために祈れ。こうして、天にいますあなたがたの父の子となるためである。天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さるからである。あなたがたが自分を愛する者を愛したからとて、なんの報いがあるろうか。そのようなことは取税人でもするではないか。兄弟だけにあいさつをしたからとて、なんのすぐれた事をしているだろうか。そのようなことは異邦人でもしているではないか。それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。マタイの福音書 52 章 42～48 節

私たちの天の父の完全さは、ただ自分自分に良くしてくれる人だけを愛することをはるかに超えてたものです。ルカは、この完全さを次のように表しています。

しかし、あなたがたは、敵を愛し、人によくしてやり、また何も当てにしないで貸してやれ。そうすれば受ける報いは大きく、あなたがたはいと高き者の子となるであろう。いと高き者は、恩を知らぬ者にも悪人にも、なさけ深いからである。あなたがたの父なる神が慈悲深いように、あなたがたも慈悲深い者となれ。ルカによる福音書 6章 35～36 節

私たちの敵を善く扱うようにという神の要求において、天の父が私たちにご自身の模範に従うことを望んでおられるからです。ですから、神に対する私たちの肉적인見解をいったん脇に置き、悪しき者の上に降り注ぐ「火の炭」とは何を意味するのかを見てみましょう。もう一度、次のように書かれている箇所を読みます。

愛する者たちよ。自分で復讐をしないで、むしろ、神の怒りに任せなさい。なぜなら、「主が言われる。復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する」と書いてあるからである。むしろ、「もしあなたの敵が飢えるなら、彼に食わせ、かわくなら、彼に飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃えさかる炭火を積むことになるのである」。ローマ人への手紙 12章 19～20 節

私たちに敵意を抱く者に対して、私たちが親切と愛を示す人の頭に注ぐ「火」とは、物理的な火のことではありません。それは、神の愛と優しさの中で、罪の恐ろしさを悟ることによって生じた火です。私たちが敵に愛を示すとき、聖霊の火をその上に注ぎ、彼の誤った道を示して悔い改めさせます。イエスは、この火について次のように語られています。

わたしは地に火を投じるために来た。それがもう燃え上がっていけばよいのだが！ルカによる福音書 12章 49 節（国際標準訳聖書）

## 神の愛—いのちの香りか、燃える苦悩か

イエスは、完全な犠牲と無私の生涯を歩み、律法がどのように私たちの心に刻まれるべきかを示し、私たち自身の罪深い利己心に対して言い訳の余地を

残しませんでした。イエスが地上で父の愛に満ちた御品性の真理を現されたことによって、実際に一つの火がともされました。それは、罪悪感を感じずに墮落した生き方を続けるために人間が作り出す、あらゆる自己欺瞞を焼き尽くす霊的な火です。この火は、悔い改める者の心から罪を焼き尽くすか、あるいは、常に彼らの救いのために働いてきた方の恵み深い顔を見る最後の日に、彼らがその方を拒んだために彼ら自身を焼き尽くすでしょう。

拒む者たちの反応：そして天は巻物が巻かれるように消えていき、すべての山と島とはその場所から移されてしまった。地の王たち、高官、千卒長、富める者、勇者、奴隷、自由人らはみな、ほら穴や山の岩かげに、身をかくした。そして、山と岩とにむかって言った、「さあ、われわれをおおって、御座にいます方の御顔と小羊の怒りとから、かくまってくれ。御怒りの大いなる日が、すでに来たのだ。だれが、その前に立つことができようか」。ヨハネの啓示録 6章 14～17節

受け入れる者たちの反応：また主はこの山で、すべての民のかぶっている顔おおいと、すべての国のおおっているおおい物とを破られる。主はとこしえに死を滅ぼし、主なる神はすべての顔から涙をぬぐい、その民のはずかしめを全地の上から除かれる。これは主の語られたことである。その日、人は言う、「見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる。これは主である。わたしたちは彼を待ち望んだ。わたしたちはその救いを喜び楽しもう」と。イザヤ書 25章 7～9節 (参照：ダニエル書 10章 5～7節)

同じような反応が、ダニエル書 3章にも見られます。

ネブカデネザルは彼らに言った、「シャデラク、メシヤク、アベデネゴよ、あなたがたがわが神々に仕えず、またわたしの立てた金の像を拝まないとは、ほんとうなのか...もし拝むことをしないならば、ただちに火の燃える炉の中に投げ込まれるだろう...王の命令はきびしく、かつ炉は、はなはだしく熱していたので、シャデラク、メシヤクおよびアベデネゴを引きつられていった人々は、その火炎に焼き殺された...その時、ネブカデネザル王は驚いた...そして言った、「しかし、わたしの

見るのに四人の者がなわめなしに、火の中を歩いているが、なんの害をも受けていない。その第四の者の様子は神の子のようだ。」... やがて、シャデラク、メシャク、アベデネゴはその火の中から出てきた... 火は彼らの身にはなんの力もなく、その頭の毛は焼けず、その外套はそこなわれず、火のにおいもこれに付かなかった。ダニエル書 3章 14～27節

そして再びヨハネの福音書において；ある者は雷の音を、別の者は天使の声を聞きました。

父よ、み名があがめられますように。すると天から声があった、「わたしはすでに栄光をあらわした。そして、更にそれをあらわすであろう」。すると、そこに立っていた群衆がこれを聞いて、「雷がなったのだ」と言い、ほかの人たちは、「御使が彼に話しかけたのだ」と言った。ヨハネによる福音書 12章 28～29節

マタイによる福音書 21章 12～16節とヨハネによる福音書 2章 13～17節の両方で、マタイもヨハネも、イエスがむちを振りかざして神殿に入り、神を自分たちと同じ存在として見せかけ、人々を欺くことによって、神の眞の御品性をゆがめ、腐敗した宗教指導者たちと、彼らと結託した両替人たちを追い出されたことを記しています（詩篇 50章 16～21節）。この場面においても、イエスは暴力をふるわれませんでした。古の預言者が宣言しました「彼は暴虐を行わなかった」（イザヤ 53章 9節）。イエスが誰かを打たれたことはなく、自己非難する用心を持つ者だけが恐れて逃げ出したのです。しかし、その出来事を目撃していた幼い子どもたちは少しも恐れず、神の賛美歌を歌い始めました。また、盲人や足の不自由な人々はその場にとどまり、癒やされたのです。

贖われた者にとって、神のアガペー（愛）の現れは「いのちの香り」であります。それ以外の者にとっては、これらの光景は「魂を苦しめる火」となり、罪がどれほど深く彼らの内に入り込んでいたか、また、この栄光を知らながら背を向けてきたかに応じて、その苦しみは深くなります。ここに、悪しき者たちが受ける苦しみの源が示されています。神がルシファーの墮落について語られたとき、この霊的な火がどこから来るのかを明らかにされました。

あなたは不正な交易をして犯した多くの罪によってあなたの聖所を汚したゆえ、わたしはあなたの中から火を出してあなたを焼き、あなたを見るすべての者の前であなたを地の上の灰とした。エゼキエル書 28 章 18 節

始めに、この火はルシファーの不義によって彼の心のうちにともされたものですが、千年期の後には、愛と光そのものであるお方の存在によって、その火は完全に現されることになるのです。

わたしをあなたの心に置いて印のようにし、あなたの腕に置いて印のようにしてください。愛は死のように強く、ねたみは墓のように残酷だからです。そのきらめきは火のきらめき、最もはげしい炎です。愛は大水も消すことができない、洪水もおぼれさせることができない。もし人がその家の財産をことごとく与えて、愛に換えようとするならば、いたくいやしめられるでしょう。雅歌 8 章 6～7 節

父なる神の御臨在から放たれる燃えるような愛は、サタンの内に潜んでいたあらゆる邪悪な欲望を引き出し、その火は彼を灰に変えることになります。そして、罪によって彼の精神を受け入れてしまったすべての者たちも、同じようにその火によって灰に変わるでしょう。

また、あなたがたは悪人を踏みつけ、わたしが事を行う日に、彼らはあなたがたの足の裏の下にあって、灰のようになると、万軍の主は言われる。マラキ書 4 章 3 節

ついに、神の御臨在が、墮落したケルブの内に潜んでいたあの恐ろしい火をあらわにし、その炎は彼を、そして彼に従った者たちをも焼き尽くし、彼らを灰に変えるでしょう。私たちは、この火の源が神のうちではなく、サタン自身の内側から出るものであることを思い起こします。

悪しき者たちはついに、自らの反逆の生涯によって失ったものを悟ります。彼ら自身の生き方そのものが、神の御子に支配されることを望まないと宣言したのです。かつて不信仰なユダヤ人たちがイエスをメシアとして退けたように、悪しき者たちは自らを永遠の命にふさわしくない者として断罪しました。（使徒行伝 13 章 46 節）。すべてをさらけ出すこの愛の光の中で、悪しき者たちはサタンに立ち向かい、彼が恩人ではなく、むしろ彼らをその破

滅に共に導いたことを知りました。まさにこの瞬間、霊的な火が物理的な火として現れるのです。彼らの魂の奥底から噴き上がる怒りがサタンに向けて燃え上がります。イザヤ書 14 章 12～18 節にはこう書かれています。

橋明の子、明けの明星よ、あなたは天から落ちてしまった。もろもろの国を倒した者よ、あなたは切られて地に倒れてしまった。あなたはさきに心のうちに言った、『わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき...いと高き者のようになろう』。しかしあなたは陰府に落され、穴の奥底に入れられる。あなたを見る者をつくづくあなたを見、あなたに目をとめて言う、「この人は地を震わせ、国々を動かし、世界を荒野のようにし、その都市をこわし、捕えた者をその家に解き帰さなかった者であるのか」。もろもろの国の王たちは皆尊いさまで、自分の墓に眠る。それゆえ、主なる神はこう言われる、あなたは自分を神のように賢いと思っているゆえ、見よ、わたしは、もろもろの国民の最も恐れている異邦人をあなたに攻めこさせる。彼らはずるぎを抜いて、あなたが知恵をもって得た美しいものに向かい、彼らあなたの輝きを汚し、彼らあなたを穴に投げ入れる。...わたしはあなたを神の山から汚れたものとして投げ出し、守護のケルブはあなたを火の石の間から追い出した。...わたしはあなたを地に投げうち、王たちの前に置いて見せ物とした。...わたしはあなたを見るすべての者の前であなたを地の上の灰とした。...あなたは恐るべき終りを遂げ、永遠にうせはてる」。エゼキエル書 28 章 6～8 節, 16～19 節

万軍の主は言われる、見よ、炉のように燃える日が来る。その時すべて高ぶる者と、悪を行う者とは、わらようになる。その来る日は、彼らを焼き尽して、根も枝も残さない。マラキ書 4 章 1 節

しかし、主の日は盗人のように襲って来る。その日には、天は大音響をたてて消え去り、天体は焼けてくずれ、地とその上に造り出されたものも、みな焼きつくされるであろう。ペテロの第二の手紙 3 章 10 節

ここで読者に思い起こしていただきたいのは、イエスが、終わりの日に裁きを行うのはご自分ではなく、ご自分が語られた「御言葉」であると教えられたことです（ヨハネ 12 章 47～48 節）。神は、その裁きにおいて致命的な力を用いておられません。この真理は、アポクリファ（外典）に含まれる十四巻の一つによっても確認されており、これらの書は、カバデル聖書、マシュー＝ティンダル聖書、大聖書（The Great Bible）、ジュネーブ聖書、主教聖書（The Bishop's Bible）、そして 1611 年に印刷された初版キング・ジェームズ聖書などに収められていました。

これから引用するのは、その中のエズラ記下 13 章 37～38 節です。

そして、このわたしの子は、その邪悪な生き方のゆえに嵐の中へと落ち込んだ国々の、悪しき企みを戒めるであろう。また、彼らの悪しき思いと、これから彼ら自身を火のような苦しみによって始めるその苦悩を彼らの前に明らかにする。そして、彼はわたしに似た律法によって、彼らを労することなく滅ぼすのである。

ここに、悪しき者たちが受ける罰が、律法の「映し出す働き」を通して罰せられるという思想が確認されます。これは、コラ、ダタン、アビラムの例にも見られるように、彼らが「生きたままよみに落ちていった」（民数記 16 章 28～33 節）出来事に示されています。このとき神は、彼ら自身が、「またもや神の御子を、自ら十字架につける」（ブライへの手紙 6 章 6 節）者たちのように、神の守りの垣根から自ら踏み出してしまったことを明らかにされました。彼らは「穴を掘りって、それを深くし、みずから作った穴に陥る」（詩篇 7 篇 15 節）者たちだったのです。したがって、パウロは、民数記に記録されている彼らの罪深い態度に言及し、私たちに次のように勧めています。

兄弟たちよ。このことを知らずにいてもらいたくない。わたしたちの先祖はみな雲の下におり、みな海を通り、みな雲の中、海の中で、モーセにつくバプテスマを受けた。また、みな同じ霊の食物を食べ、みな同じ霊の飲み物を飲んだ。すなわち、彼らについてきた霊の岩から飲んだのであるが、この岩はキリストにほかならない。しかし、彼らの中の大多数は、神のみこころにかなわなかったので、荒野で滅ぼされてしまった。こ

これらの出来事は、わたしたちに対する警告であって、彼らが悪をむさぼったように、わたしたちも悪をむさぼることのないためなのである。だから、彼らの中のある者たちのように、偶像礼拝者になってはならない。すなわち、「民は座して飲み食いをし、また立って踊り戯れた」と書いてある。また、ある者たちがしたように、わたしたちは不品行をしてはならない。不品行をしたため倒された者が、一日に二万三千人もあった。また、ある者たちがしたように、わたしたちは主を試みてはならない。主を試みた者は、へびに殺された。また、ある者たちがつぶやいたように、つぶやいてはならない。つぶやいた者は、「死の使」に滅ぼされた。これらの事が彼らに起ったのは、他に対する警告としてであって、それが書かれたのは、世の終りに臨んでいるわたしたちに対する訓戒のためである。だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい。コリント人への手紙一 10 章 1～12 節

パウロがここで「破壊者」という言葉に用いたギリシア語は ὀλοθρευτής (オロスレウテス) で、文字通りには「毒をもつ蛇」という意味です。では、この破壊する蛇とは誰なのでしょう。

この巨大な龍、すなわち、**悪魔**とか、**サタン**とか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへびは、地に投げ落され、その使たちも、もろともに投げ落された。ヨハネの黙示録 12 章 9 節

だから、あなたがたは、神の力強い御手の下に、自らを低くしなさい。時が来れば神はあなたがたを高くしてくださるのである。神はあなたがたをかえりみていて下さるのであるから、自分の思いわずらいを、いっさい神にゆだねるがよい。身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である**悪魔**が、ほえたけるししののように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている。ペテロの第一の手紙 5 章 6～8 節

明らかに、サタンは、破壊者ですが、神は回復されるお方です。だからこそ、次の聖句の意味が明らかになってくるのです。

その夜わたしはエジプトの国を巡って、エジプトの国における人

と獣との、すべてのういごを打ち、またエジプトのすべての神々に審判を行うであろう。わたしは主である。出エジプト記 12章12節

これまで学んできたことから考えると、エジプトの全ての初子を殺したのは本当に神ご自身だったと信じるべきなのでしょうか。それとも、エジプト人が神を拒んだ結果、サタン—破壊者—に自らを無防備にしてしまったのでしょうか。もう少し先の節を読んでみましょう。

主が行き巡ってエジプトびとを撃たれるとき、かもいと入口の二つの柱にある血を見て、主はその入口を過ぎ越し、滅ぼす者が、あなたがたの家にはいって、撃つのを許されないであろう。出エジプト記 12章23節

人が神を拒むと破滅が訪れるのは、神があなたの選択の自由に決して干渉しないからです。神は涙ながらに、あなたのご自身の守りの恵みから離れていくことを許されます。しかし、実際に破壊をもたらすのは、あなた自身の悪と、死の起源であるサタンなのです。

彼（神）は彼らの上に激しい怒りと、憤りと、恨みと、悩みと、滅ぼす天使の群れとを放たれた。詩篇 78章49節

ここで使われているヘブライ語の「送る」という語は、より正確には「解き放つ」「放ち出す」と訳します。キリストと悪い天使たちが協力しているわけではありません。キリストと御使いたちは、あなたを守るためにサタンとその悪い天使たちを押しとどめておられます。しかし、キリストの守りがなければ、あなた自身がこれらの悪しき天使たちの“解き放ち”を選んでいることになるのです。

## 神の栄光ある性質

私たちが聖書をどのように読むかは、私たちがどのように裁かれるかに深く関わっています。なぜなら、神の言葉は、堅くなった心を打ち砕く槌であり、不純物や錫を焼き尽くす火でもあるからです（エゼキエル 22章19～22節）。

そして彼は言った「主はシナイから来られ、セイルからわれわれにむかってのぼられ、パランの山から光を放たれ、ちよろず

の聖者の中から来られた。その右の手には燃える火があった。」

申命記 33 章 2 節

主は仰せられる、わたしの言葉は火のようではないか。また岩を打ち砕く鎚のようではないか。エレミヤ書 23 章 29 節

わたしたちの神は、実に、焼きつくす火である。ヘブル人への手紙 12 章 29 節

神の律法が“火”のようであるのは、それが神ご自身の御品性を写し取ったものだからです。前に学んだ第二エズラ記 13 章 38 節で、神は「わたしに似た律法」と語られました。前に見たように、この“火”とは、神の御品性そのもの、すなわち純粋で高貴な愛から出て来るものです。「愛さない者は、神を知らない。神は愛である。」（ヨハネ第一 4 章 8 節）。ここで注目すべきなのは、“神は愛に満ちておられる”とか“神は愛を持っておられる”とは書かれておらず、“神は愛である”と断言しているのです。したがって、神の名、すなわち神の御品性が示されるとき、常にその先頭に立つのは憐れみなのです。

主はこう言われる、知恵ある人はその知恵を誇ってはならない。力ある人はその力を誇ってはならない。富める者はその富を誇ってはならない。誇る者はこれを誇とせよ。すなわち、さとくあって、わたしを知っていること、わたしが主であって、地に、いつくしみと公平と正義を行っている者であることを知ることがそれである。わたしはこれらの事を喜ぶと、主は言われる。

エレミヤ書 9 章 23～24 節

愛が神の本質そのものである以上、神の他のすべての特質は、その愛が現れ、あるいは愛を伝えるための手段にすぎないことを意味します。つまり、神がなさることはすべて、愛によって動かされているのです。私たちの父なる神の正義は、厳格で憐れみを欠いたものではありません。むしろ、サタンこそが、あたかも神のうちでは憐れみと正義が両立しないかのように見せかけようとするのです。それに対して神は、いつも愛をもってご自分の子供たちに働きかけておられます。聖書は、この愛を“火”として表現しています。

わたしを刻みつけてください あなたの心に、印章として あなたの腕に、印章として。愛は死のように強く 熱情は陰府のよ

うに酷い。火花を散らして燃える炎。主の炎そのものです。

雅歌 8章6節 (標準英語訳聖書)

どうして愛が“激しい”と言えるのでしょうか。天の父の愛は、罪の本性—その破壊的な性質—を容赦なく明らかにします。この愛こそが、悪しき者たちを苦しめる“炎”なのです。

同じ者は神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲み、聖なる御使たちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。ヨハネの黙示録 14章10節

ここで「硫黄」と訳されているギリシア語は次のように説明されています。

Θειον: (“硫黄”，“神聖な”に関連 – 神性に関わる) ストロングの定義: 1. 硫黄 a. 神聖な香...

この火は、神の公正な御品性に反することになるため、永遠に悪しき者を燃やすことはできません。なぜなら、神の正しい御品性と矛盾してしまうからです。しかし、黙示録 14章は続けてこう言っているのではないのでしょうか...

その苦しみの煙は世々限りなく立ちのぼり、そして、獣とその像とを拝む者、また、だれでもその名の刻印を受けている者は、昼も夜も休みが得られない。

しかし、ここで注目すべきなのは、“永遠に”昇っていくのは“煙”だという点です。煙とは、何かが灰になるまで焼き尽くされた後に残るものです。この煙は、罪の記憶とその破壊的な性質を象徴しています。それは決して忘れ去られることはありません。

しかし、ではユダ7節に出てくる“永遠の火”とはどうでしょうか。

ソドム、ゴモラも、まわりの町々も、同様であって、同じように淫行にふけり、不自然な肉欲に走ったので、永遠の火の刑罰を受け、人々の見せしめにされている。

では、これら二つの町は今も燃え続けているのでしょうか。いいえ、そうではありません。ユダはまた、ソドムとゴモラの滅びが“見せしめとして示された”とも言っています。では、彼はどのような見せしめを

指しているのでしょうか。その答えは、第二ペテロ 2 章 6 節にあります。

また、ソドムとゴモラの町々を灰に帰せしめて破滅に処し、不信仰に走ろうとする人々の見せしめとした。

ペテロは、これら二つの町が“灰”にされたと述べており、これこそが悪しき者たちの終わりの“見せしめ”だと言っています。したがって、同じ“永遠の火”がサタンとその従者たちを滅ぼし、彼らを灰にする（焼き尽くす）と結論づけるべきなのです。思い出してください。マラキ 4 章 3 節にはこうあります。「あなたがたは悪しき者を踏みつける。彼らはあなたがたの足の裏の下で灰となる。」破壊こそが永遠なのです。イエスは、「信じる者」だけが「永遠のいのち」を受け、信じない者のように「滅びる」ことはないと教えられました（ヨハネによる福音書 3 章 16 節）。またパウロは、悪しき者が受けるのは永遠の死であると述べています（ローマ 6 章 23 節）。神の無私のお愛を拒み続けることで、心は自己中心的・自己満足的な心の、ままになり、乾いた藁のように、簡単に火がつく状態になってしまうのです。

あなたがたは、もみがらをはらみ、わらを産む。あなたがたの息（霊）は火となって、あなたがたを食いつくす。もろもろの民は焼かれて石灰のようになり、いばらが切られて火に燃やされたようになる」。イザヤ書 33 章 11～12 節

結局のところ、すべてはあなたが神のお愛をどのように扱うかにかかっています。もしその愛を拒むなら、自己判断と罪責感があなたを灰にしてしまうでしょう。しかし、その愛を受け入れるなら、神の燃えるような愛はあなたの罪深さを清め、あなたにとって永遠のいのちとなります。イザヤが提示する、誰が焼き尽くす火の中に住むのかという問いに注意してください。

...われわれのうち、だれが焼きつくす火の中におることができよう。われわれのうち、だれがとこしえの燃える火の中におることができよう。イザヤ書 33 章 14 節

キリスト教世界のほとんどは、“永遠の焼き尽くす火”の中に住むのは悪しき者だと答えるでしょう。しかし、イザヤは自分の問いに対する答えを、次の節でこう述べています。

正しく歩む者、正直に語る者、しえたげて得た利をいやしめる

者、手を振って、まいないを取らない者、耳をふさいで血を流す謀略を聞かない者、目を閉じて悪を見ない者。イザヤ書 33 章 15 節

永遠の火の中に住むのは、イエスとその義を受け入れた者たちです。彼らは、“聖霊と火によって” **バプテスマ**（完全に浸されること）を受けたからです（マタイ 3 章 11 節）。確かに、この火は消すことのできないものであることは確かです。

もし、あなたの片手が罪を犯させるなら、それを切り捨てなさい。両手がそろったままで地獄の消えない火の中に落ち込むよりは、片手になって命に入る方がよい。地獄では、うじがつきず、火も消えることがない。マルコの福音書 9 章 43～44 節

消すという言葉は、「火を消し止める」「鎮火させる」という意味です。つまり、誰にもこの火を消すことができないということです。エレミヤは、エルサレムが消すことのできない火によって滅ぼされると預言しました。

しかし、もしあなたがたがわたしに聞き従わないで、安息日を聖別して守ることをせず、安息日に荷をたずさえてエルサレムの門にはいるならば、わたしは火をその門の中に燃やして、エルサレムのもろもろの宮殿を焼き滅ぼす。その火は消えることがない。エレミヤ書 17 章 27 節

まず注目すべきなのは、この消すことのできない火が「エルサレムの宮殿を食い尽くす（焼き尽くす）」と述べられている点です。実際、この火によってエルサレムは“荒れ果てた”状態になりましたが、その荒廃は 70 年間だけでした（歴代誌下 36 章 19～21 節）。エルサレムは消すことのできない火で焼かれましたが、現在エルサレムが燃えているわけではありません。この火が消すことのできない火と言われているのは、誰もその火を止めることができなかったからです。しかし、その火は自ら燃え尽きました。この火は、エルサレムを荒廃させるという目的を果たすまで消えることはありませんでした。イザヤが火の湖について語っていることを読むと、全体の状況が一気に明確になります。

見よ、彼らはわらのようになって、火に焼き滅ぼされ、自分の身を炎の勢いから、救い出すことができない。その火は身を

暖める炭火ではない、またその前に座るべき火でもない。イザヤ書 47 章 14 節

イザヤもまた、「その民は火の燃えくさのようになり、だれもその兄弟をあわれむ者がいない。」（イザヤ書 9 章 19 節）と予言しました。

多くの人々は、マルコによる福音書 9 章 44 節でイエスが語られた「虫」が、地獄の火の中で決して死なない魂を指していると考えています。しかしイエスは、地獄では身体も魂も滅ぼされると明確に言われます（マタイ 10 章 28 節）、つまり、終わりのない拷問の中で生き続けるのではありません。神は涙ながらに警告されています。「罪を犯す魂は、死ぬ」（エゼキエル 18 章 4 節）。実際のところ、イエスが言われた虫とは、死体を食べる文字通りのウジ（蛆）のことなのです。イザヤはこう述べています。

あなたの栄華とあなたの琴の音は陰府に落ちてしまった。うじはあなたの下に敷かれ、みみずはあなたをおおっている。イザヤ書 14 章 11 節

彼らは衣のように、しみに食われ、羊の毛のように虫に食われるからだ。しかし、わが義はとこしえにながらえ、わが救はよろず代に及ぶ。イザヤ書 51 章 8 節

イエスはこう言われました。「そして彼らは**永遠の刑罰**を受け、正しい者は永遠の生命に入るであろう」（マタイ 25 章 46 節）。では、悪しき者に対する「罰」とは何でしょうか。「罪の報酬は死である」（ローマ 6 章 23 節）とあります。神が彼らに死という報酬（罰する/報いる）を与えるわけではありません。彼らは罪の人生を選び続けたため、罪そのものが彼らに死という報酬を支払うのです（原因と結果/結果として）。そしてこの死は「永遠のもの」となるです。彼らは二度と生き返ることはありません。なぜなら、彼ら自身が生命の唯一の源である神から切り離されることを選んだからです。ここで「罰」と訳されているギリシア語 *κόλασις* (*kolasis*) は、本来「剥奪」という意味を持っています。つまり、彼らは命を剥奪されるのです。彼らは「永遠の命の剥奪へと去っていく」のです。これこそが、彼らが決して真の「安らぎ」を得られない理由です（黙示録 14 章 11 節）。なぜなら、彼らは神の愛に満ちた/憐れみにあふれる御臨在を拒んだからです（出エジプト記 33 章 14 節；マタイ 11 章 28～29 節）。

イエスの言葉をよく見てください。悪しき者は「永遠の罰（＝命の剥奪）」へと入って行きますが、義人は「永遠の命」へと入って行きます。つまり、キリストのうちにある者だけが永遠の命を受けるのです。

神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。

*ヨハネの福音書 3章16～17節*

私たちが、悪しき者が終わりなく燃え続けると教えるとき、それは彼らが永遠の命を持つと教えていることになります。苦痛に満ちた永遠の命ではありませんが、それでも永遠の命です。しかし、そうではありません。“永遠の命”を受けるのはキリストのうちにある者だけです。なぜなら、イエスこそが、「命」であり（ヨハネ 14章6節）、永遠の命は義のいのちだけだからです（申命記 30章15～20節）。ヨハネはこう述べています。

御子を持つ者は命を持ち、神の御子を持たない者は命を持っていない。*ヨハネの第一の手紙 5章12節*

イエスを持たない者は死を受けます—永遠（終わりのない）の死です！「永遠の罰」という言葉の代わりに、パウロは「永遠の滅び」という言葉を使っています（テサロニケ第二 1章9節）。それは永遠に続く滅び（死）です！

今日、私たちは神の御品性に関するこの真理の狭い道を、さらに一歩進んで歩むよう招かれています。私たちの天の父は、この苦しみの源ではなく、むしろ神の愛に満ちた御臨在が、罪の破壊的な本質を明らかにし、そのプロセスこそが裁きを成し遂げるのです。

## 神からの火か

死なない虫、暗闇の鎖、そして消すことのできない火、これらはすべて、サタンの幹に自らを接ぎ木してしまった者たちの経験を象徴しています。この罪人の状態は、もはや彼らが自らの罪に対して真実の悔い改めを行う機会から外れており、したがって、天の父の赦しを受ける道からも外れてしまっています。これが、罪が人の心を固くなくしてしまうということです。もちろん

ん、地上を清め、新しい状態へと備えるために、物理的な火も存在します。健全な森林火事が森に新しい命をもたらすような例えを考えることができます。では、神が致命的な力を用いないのなら、この物理的な火はどこから来るのでしょうか。いくつかの翻訳では、「神から」という語句が括弧に入られていたり、また中にはまったく省かれているものもあります。

彼らは地上の広い所に上り、聖徒たちの陣営と愛されていた都とを包囲した。すると、天から [神から] 火が下ってきて、彼らを焼き尽した。ヨハネの黙示録 20 章 9 節ダービー訳

彼らは地上の広い所に上り、聖徒たちの陣営と愛されていた都とを取り囲んだ。すると、天から火が下ってきて、彼らを焼き尽した。ヨハネの黙示録 20 章 9 節アメリカ標準訳

彼らは地上の広い所に上って来て、聖徒たちの陣営と愛されていた都とを包囲した。すると、天から火が下ってきて、彼らを焼き尽した。ヨハネの黙示録 20 章 9 節キリスト教標準聖書

そして彼らは地上の広い平原を進軍して上り、聖徒たちの陣営と愛されていた都とを取り囲んだ。しかし、天から火が下ってきて、彼らを焼き尽した。ヨハネの黙示録 20 章 9 節英語標準訳

翻訳者たちは、「神から」という語句を含む箇所を翻訳する際に、人間の神について抱く罪深い思考も翻訳してしまったのでしょうか。墮落した人間は、神の御品性よりも神の御力を崇めようとします。なぜなら、人間自身が、神の御品性よりも、神の御力の方を求めるからです。特に、その性質が自己犠牲のものであるため（マタイ 16 章 24 節）です。そのため、人は自分が神に持ってほしい力を強調するように聖句を訳し、あまり価値を置かない御品性は軽く扱ってしまうのです。こうして私たちは、律法を行う者ではなく、旧約の聞き手（ヤコブ 1 章 23 節）となり、神を知って信頼するのではなく、自分の計画に従って神に働いてもらうことになります。その旧約的な思考が神の律法によって反映されると、神の御品性の栄光は、まるで焼き尽くす火のように見えてしまうのである。

出エジプト記 24 章 17 節 主の栄光は山の頂で、燃える火のようにイスラエルの人々の目に見えた。

サタンは常に、人々にこう信じ込ませようとしてきました。天から火が降るのだから、それは神が直接そうしたのだと。しかし、次に挙げる例では、天から火を降らせたのはサタンの方でした。

彼がなお語っているうちに、またひとりが来て言った、「神の火が天から下って、羊およびしもべたちを焼き滅ぼしました。わたしはただひとりののがれて、あなたに告げるために来ました」。ヨブ記 1 章 16 節<sup>5</sup>

そして、先の獣の持つすべての権力をその前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷がいやされた先の獣を拝ませた。また、大いなるしるしを行って、人々の前で火を天から地に降らせることさえした。ヨハネの黙示録 13 章 12~13 節

このような考え方が弟子たちの中にさえ現れたとき、イエスはそれを戒められた。

弟子のヤコブとヨハネはこれを見ると、「主よ、エリヤがしたように、私たちが命じて天から火を降らせ、彼らを焼き尽くしましょうか」と言った。しかしイエスは振り向いて、彼らを戒めて言われた。「あなたがたは、自分がどのような霊に属しているのか分かっていない。」と。ルカによる福音書 9 章 54~55 節（欽定訳聖書より）

ここでイエスは、弟子たちだけでなく、エリヤ自身もまた神の御品性を正しく理解することに問題を抱えており、神は敵を火で滅ぼさなければならないと考えていたことを言及しておられます。しかし、神も御子も、預言者たちに対して忍耐深く接し、御自分たちの聖なる御品性と御国の原則を教えられました。再び、私たちは次のように読みます。

主は言われた、「出て、山の上で主の前に、立ちなさい」。その時主は通り過ぎられ、主の前に大きな強い風が吹き、山を裂き、岩を砕いた。しかし主は風の中におられなかった。風の後には地震があったが、地震の中にも主はおられなかった。地震の

---

<sup>5</sup> ヨブ記 1 章 12 節は、あの火がサタンの行為であったことを示しており、使者はそれを誤って神のせいだと伝えてしまった。

後に火があったが、火の中にも主はおられなかった。火の後に静かな細い声が聞えた。列王記上 19 章 11～12 節

主は物理的な火の中にはおられませんでした。なぜなら、神の御力は常に神の愛に満ちた御品性に従うからであり、神の御国は力や強制的な権力によって成り立つ国ではないからです。イエスは、ご自分の御国はこの世のものではないと教えられました。しかし、もしこの世のものであったなら、しもべたちは敵と戦ったでしょう（ヨハネ 18 章 36 節）。しかし、イエスの御国はこの世のものではない（力と強制的な権力の国ではない）ため、イエスはへりくだってご自分を敵にゆだね、拷問を受けながらも「父よ、彼らをお赦しください。彼らは自分が何をしているのか分かっていないのです」（ルカ 23:34）と祈られました。

では、なぜエリヤは、王が自分を捕らえに送った者たちを滅ぼすために、天から火を呼び下したのでしょうか。そして、もしその火が神から来たのではないとすれば、いったいどこから来たのでしょうか。

エリヤは五十人の長に答えた、「わたしがもし神の人であるならば、火が天から下って、あなたと部下の五十人とを焼き尽すでしょう」。そのように火が天から下って、彼と部下の五十人とを焼き尽した。列王記下 1 章 10 節

これが、弟子たちが言及していた事例です。ここでエリヤは、まだ神の御国に関する誤った見解を完全には振り払っておらず、天からのしるしや力によって、自分が神の預言者であることを守ろうとする誘惑に屈してしまいました。重要なのは「もし」という言葉であり、これは疑いの表現です。同じような誘惑を、サタンはイエスのもとにも持ち込みました。

すると試みる者がきて言った、「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんください」。マタイによる福音書 4 章 3 節

そして言った、「神殿を打ちこわして三日のうちに建てる者よ。もし神の子なら、自分を救え。そして十字架から降りてこい」。マタイによる福音書 27 章 40 節

これらすべてを踏まえると、千年期の後に天から火が降り、地から火が噴き上がる物理的な火の原因は何になるのでしょうか。

神の御言葉と環境の要素を考察したとき、神が自然界に組み込まれた法則は、本来、神に従い幸福に満ちた人間の品性を映し出すように設計されていたことが分かりました。人が神についてより多くの知識を得るにつれて、エデンの園は世界全体へと広がっていくことになったでしょう。しかし、キリストの御霊の代わりに叛逆の霊、すなわちサタンの霊が宿ると、地はサタンの霊にある争いと不和を現すようになりました。洪水はその時代の頂点であり、全世代が自らの内でキリストを十字架につけ、命を支える彼の力を卑しい自己中心的で下劣な目的のために用いたのです。彼らがすべてを含むキリストの御霊（「万物はキリストにあって成り立っている」コロサイの信徒への手紙 1 章 17 節、「私たちは神の中に生き、動き、存在している」使徒言行録 17 章 28 節）を完全に拒絶したとき、地はその主人である墮落した人間の霊を完全に示すことが許されたのです。私たちは、終わりの時にも同じ原理が働くことを教えられています。すなわち、人々の燃え盛る欲望が地を満たし、それがついには物理的な火として噴き出すのです。

男もまた同じように女との自然の関係を捨てて、互にその情欲の炎を燃やし、男は男に対して恥ずべきことをなし、そしてその乱行の当然の報いを、身に受けたのである。ローマ人への手紙 1 章 27 節 *[彼らは自分のまいたものの報いを受けました]*。

まず次のことを知るべきである。終りの時にあざける者たちが、あざけりながら出てきて、自分の欲情のままに生活し、「主の来臨の約束はどうなったのか。先祖たちが眠りについてから、すべてのものは天地創造の初めからそのままであって、変わってはいない」と言うであろう。すなわち、彼らはこのことを認めようとはしない。古い昔に天が存在し、地は神の言によって、水がもとになり、また、水によって成ったのであるが、その時の世界は、御言により水でおおわれて滅んでしまった。しかし、今の天と地とは、同じ御言によって保存され、不信仰な人々がさばかれ、滅ぼさるべき日に火で焼かれる時まで、そのまま保たれているのである。ペテロの手紙二 3 章 3～7 節

私たちは、洪水前に生きていた人々が、なぜこの原理を信じなかったのかと不思議に思うかもしれませんが。しかし、今日の状況も何ら変わりません。人類の歴史全体のあらゆる悪しき者たちが地上に広がり、サタンと共にその反

逆を完全に現すとき、地と天は再び、彼らの悪の燃え盛る本性を映し出すことが許されるのです。

その地もまた汚れている。ゆえに、わたしはその悪のためにこれを罰し、その地もまたその住民を吐き出すのである。...これは、あなたがたがこの地を汚して、この地があなたがたの先にいた民を吐き出したように、あなたがたをも吐き出すことのないためである。レビ記 18 章 25 節, 28 節

実に、被造物全体が、今に至るまで、共にうめき共に産みの苦しみを続けていることを、わたしたちは知っている。ローマ人への手紙 8 章 22 節

ついに、地と天は、蓄えられていた悪を火という形で吐き出された後、安らかに休むことになるでしょう。罪が取り除かれたとき、自然界は再び、住む者の聖なる美しさを反し出すことができるようになります。—その心にキリストの従順の霊と父なる神への愛に満ちた感謝の心を宿す神の子どもたちです。キリストの御品性を受け入れることによって、私たちは素晴らしい神と御子の燃えるような愛の存在の中で、永遠に生きることができるようになります。

ときに主の使は、しばの中の炎のうちに彼に現れた。彼が見ると、しばは火に燃えているのに、そのしばはなくならなかった。モーセは言った、「行ってこの大きな見ものを見、なぜしばが燃えてしまわないかを知ろう」。主は彼がきて見定めようとするのを見、神はしばの中から彼を呼んで、「モーセよ、モーセよ」と言われた。彼は「ここにいます」と言った。神は言われた、「ここに近づいてはいけない。足からくつを脱ぎなさい。あなたが立っているその場所は聖なる地だからである」。また言われた、「わたしは、あなたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」。モーセは神を見ることを恐れたので顔を隠した。出エジプト記 3 章 2~6 節

死人がよみがえることについては、モーセの書の柴の篇で、神がモーセに仰せられた言葉を読んだことがないのか。「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」とあるで

はないか。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。あなたがたは非常な思い違いをしている。マルコによる福音書 12 章 26～27 節

イエスは、燃える柴を生ける者の神である神と結びつけておられます。これは、火に燃えても消えない柴の象徴です。罪人も義人も、皆その燃えるような愛の中に置かれますが、それにどう反応するかは私たち自身に委ねられています。しかし、義人は「焼き尽くす火と共に住む」ことができます。しかし、罪深い生き方の中で抱えてきた思い・言葉・行いは、崇高な神に出会ったときに最終的に明らかになり、神を憐れみのない方と裁く者の上に向かって燃え上がります—その「息が火となって彼を焼き尽くす」のです。神は悪しき者にとっては焼き尽くす火ですが、ご自分の民にとっては太陽であり盾でもあります。

バビロンの火の炉の中に立っても焼かれなかった三人のヘブル人の若者たち（ダニエル書 3 章）のように、天の都の聖なる住民たちは、悪しき者たちの激しい怒りの霊の影響を受けることはありません。彼らは平和の君の御霊に満たされているため、自然界全体が彼らとともに平和であります。神は彼らにとって盾であり、彼らが神の御霊に満たされているという意味で、「思いを主にとどめる者には、主は完全な平安を保ってください」（イザヤ書 26 章 3 節）のです。

## 罰の度合い

では、悪しき者が受ける苦しみの大きさが、その人の罪の重さに比例するという考えについてはどうでしょうか。イエスは次のように語られました。

主人のこころを知っていながら、それに従って用意もせず勤めもしなかった僕は、多くむち打たれるであろう。しかし、知らずに打たれるようなことをした者は、打たれ方が少ないだろう。多く与えられた者からは多く求められ、多く任せられた者からは更に多く要求されるのである。ルカによる福音書 12 章 47～48 節

私たちは、聖書が律法は霊的である（ローマ 7 章 12 節）と言っていることを思い出します。悪しき者が律法に従って裁かれるとき、その苦しみはまず霊的なものであることは、すでに述べた通りです。キリストとその御心について多くの知識を持っていた者ほど、その苦しみは大きくなります。知らない人の葬儀に参列しても悲しみはそれほど深くありませんが、親しい人を失うときの悲しみは計り知れません。神と御子をサタンほど深く知っていた者はいません。彼は神の聖なる火の石の間を歩き回っていたのです（エゼキエル書 28 章 14 節）。—これは律法で象徴される神の御品性です（申命記 33 章 2 節）。だからこそ、彼の苦しみは最も大きく、誰よりも長く苦しむことになるのです。聖書は、誰がサタンを長く苦しませるのかについては語っていません。それは読者が判断することには委ねられています。私たちは、イエス裁きを行う様子から、罪人自身が自らに宣告を下すことが分かります。

そしてこれを聞いた者たちは、自分の良心に責められて、彼らは年寄から始めて、ひとりびとり出て行き、ついに、イエスだけになり、女は中にいたまま残された。ヨハネによる福音書 8 章 9 節

ハマンの物語もまた、サタンがなぜこれほど長く苦しまなければならないのかを示しています。

その時、王に付き添っていたひとりの侍従ハルボナが「王のためにより事を告げたあのモルデカイのためにハマンが用意した高さ五十キュビトの木がハマンの家に立っています」と言ったので、王は「彼をそれに掛けよ」と言った。そこで人々はハマンをモルデカイのために備えてあったその木に掛けた。こうして王の怒りは和らいだ。エステル記 7 章 9～10 節

ハマンとモルデカイは、それぞれサタンとキリストを表しています。サタンがキリストに望んだ罰は、自分自身が受けることになるのです。次のように書かれています。

人をさばくな。自分がさばかれないためである。あなたがたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるであろう。マタイの福音書 7 章 1～2 節

また、次のようにも書かれています。

悪を抱き、破壊的な計略を思い描き、有害な嘘を生み出す者を見よ。彼は穴を掘り、やがて自ら作った穴に落ちる。自分の**破壊的な計略の犠牲**となり、**他人に向けた暴力が自分の頭上に降りかかる**。詩篇 7:14-16 新英語訳

人は皆、自分が他者に対して神が行うべきだと思っていた正義を、自ら経験することになります。他者に対して示してきた憎しみや復讐心が大きければ大きいほど、それは神の愛の律法という鏡に映し返され、自分の本性の完全な墮落を目の当たりにすることになります。他人が地獄で苦しむことを望む者は、まさに他者に要求したのと同じ激しさで、自ら地獄で朽ち果てることになります。だからこそ、赦しなさい。そうすればあなたも赦されるでしょう。人があなたに負っている負債をすべて免してあげなさい。敵対する者と心の中で和解し、平和を築きなさい。さもなければ、あなたが他者を裁き、罪に定めたその同じ裁き手、すなわち自分自身に引き渡されることになります。

ですから、他人を裁くあなた方よ、一人残らず弁解の余地はありません。他人を裁きながら、裁くあなた自身も全く同じことを行っているからです。ローマ人への手紙 2:1 国際標準版

## 結論

本書では、「悪は悪しき者を殺す。正しい者を憎む者は罪に定められる。」（詩篇 34 篇 21 節）という真理が明確に示されています。罪人を滅ぼすのは、彼の心の内にある悪の現れなのです。この火は、神の御前で罪人の心に生じる罪責感によって生み出されます。要約すると、いくつかの簡単な事実を思い起こします。

1. 義に至る道は狭く、世の大多数は神の愛に満ちた恵みを拒むだろう。イエスは、永遠のいのちに至る道は狭くて厳しく、それを見いだす者は少ないと言われた。マタイの福音書 7 章 14 節
2. 悪人は死に、自らの反逆が生み出す罪の苦しみによって押しつぶされ、永遠に滅びるだろう。
3. 人間の罪深さを映し出す自然の法則を通して悪人は滅びるが、同時に、恥ずべき人生の重みに圧倒され、見捨てられたように感じるのである。
4. 神の側には、悪人の命を終わらせようとする攻撃や強制、あるいは願望は一切ない。悪人は自らの手で作った罠にかかり、自分で掘った穴に落ちて滅びるのである（詩篇 7 篇 15 章；9 篇 16 章）。

# 焼き尽くす炎

## 祝福の香りか、裁きの炎か？

多くの信仰者は、罪を終わらせる唯一の方法は、神の心から燃え上がる怒りの火を降らせて悪人を焼き尽くすことだと考えています。悪人は自ら滅びるのではなく、もし神が正義の神であるなら、神は罪を犯す者を罰し、その行いに応じて罪人を直接火に投げ込み、生きたまま焼き尽くすことで報いるはずだと考えられているのです。愛なる神が本当にそのようなことを御自分の子どもたちにされるのでしょうか。

あなたは、わがままな子どもをきたまま炎で焼き尽くし、悲しみの上げる姿を見届けますか。がんを取り切除するしかない、と言う人もいま推の問題点は、がんを切除する目とであって、破壊することではな

す。また、悪人は狂犬病の犬のようにと言う人もいます。また、犬を火の上で

り焼き、犬が悲鳴をあげる中、義人たちが「もう少しだ、悪をしたのだから当然だ」と叫ぶのでしょうか。本当に、最後にそのようなことが起こるのでしょうか。



生  
叫びを  
除くには  
す。この類  
的は命を救うこ  
いということだ  
安楽死させるべきだ  
何日もかけてゆっくり

まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみを担った。しかるに、われわれは思った、彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。イザヤ書 53章4節

[fatheroflove.info](http://fatheroflove.info)